

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24652114

研究課題名(和文)ライティングの際の思考を促進させる「キュー・カード」の開発

研究課題名(英文) A study to prove the efficacy of "cue cards" as procedural facilitation in composing processes

研究代表者

大井 恭子(Oi, Kyoko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：70176816

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：作文産出中に書く事に困難を感じている学習者に「手続き促進法(procedural facilitation)」(Bereiter & Scardamalia, 1987)と呼ばれる「キュー」を出すことで、作文過程での内省を促し、問題解決を促進させることができることが知られている。指導者(教師)がこうした「キュー・カード」を授業等に使用することにより、書き手に思考を促進させ、より深く思考させ、まとまりのある文章を書く上で支援を果たすことができると着想した。実際に中学生(N=477)を対象に実証研究をしたところ、「キュー・カード」の有効性が確かめられた。

研究成果の概要(英文)：It has been known for some time that giving "cues" known as procedural facilitation to those who are having difficulty in continuing composing facilitates writers' reflection in their composing processes and thereby leads them to problem-solution. Propelled by this idea, I have come up with a teaching method that utilizes "cue cards" to facilitate students' thinking and help them to continue composing so that they can write a coherent and cohesive passage. A total of 477 junior high school students and seven English-language teachers participated in this study. By utilizing various "cue cards", I proved that the students, who were in a state of "writer's block" conquered this difficulty and came to succeed in writing a coherent and cohesive passage. Hence, the efficiency of using appropriate cue cards in writing classroom was proved.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：EFLライティング 手続き促進法 キュー・カード

1. 研究開始当初の背景

急速にグローバル化が進む今日の国際社会にあっては英語で発信することの重要性が叫ばれている。それに呼応するかのように、来年度から新たに施行される新学習指導要領中学校「外国語」では、「発信力」養成や内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視するよう求めている。それは、指導要領の「総論」でのべられている「思考力・判断力・表現力」をつけるために「書くことの充実」が寄与する面が多いという判断もあるであろう。しかしながら、そもそも外国語によるライティングというのは認知的負荷が高い活動であることは否めない。ただ単に語彙がわからない、文構造をよく理解していない、ということの前に、「外国語で考えながら書く」という自体にかなりの認知的負荷がかかるのである。これまでの第二言語作文教育においては、学習者が書き上げた作文への誤り訂正などフィードバック研究などが盛んに行われてきたが、作文過程に関して認知的観点から「書く」という行為とはそもそもどのような認知負荷がかかるものなのか、そしてその負荷軽減のために、学習者をどのように支援するかという視点から取り組まれた研究は少ない。ここで必要なのは、「思考力・判断力・表現力」をつけるために「書くこと」への認知的支援をどのように具体的に講じて行くかという点である。

2. 研究の目的

研究期間中に本研究では、まずは学習者がライティングする際、どこでつまづいているのかを探索する。学習者が書いた「内省記述」及び実際のプロダクトを突き合わせ、書き手がどのような「ライターズ・ブロック」に突き当たっているかを同定する。

それら、「ライターズ・ブロック」が整理されたら、それに対処する方策を考える。

作文産出中に書く事に困難を感じている学習者に「手続き促進法 (procedural facilitation) (Bereiter & Scardamalia, 1987) と呼ばれる「キュー」を出すことで、作文過程での内省を促し、問題解決を促進させることが知られている。学習者が実際のライティング過程で、書き手が書くこうとしている目標設定を実現させる有効な手立てを書き手の自問自答を拾い出し、「問い集」として編纂することを目的とする。これを指導者(教師)が授業等に使用することにより、書

き手に思考を促進させ、より深く思考させ、書く支援を果たすことができると考える。これまで提出された「手続き促進法」による研究は母語話者を対象にしたものであった。本研究では、有効な手立てが英語を第二言語とする日本人学習者にとっても有効であるかを探る。さらに、英語母語話者に無関係であったとしても日本人にとっては殊に有効な手段となるべき「手続き促進法」の具体例を見出し、学習者の思考を促し、書く事への支援のツールとして提出することを目的とする。

3. 研究の方法

2012年度は主として、中学校におけるライティングの重要性に関し、知見をまとめ、中学校のライティング支援策としてこれまで大井研究室関連教員により、作成され、使用されたものを整理した。その成果物として、『発信力をつけるライティング いまここから Here and Now』を出版した。(2013年3月)

2013年度は昨年度収集した中学生作文データを分析した。さらに、実際にキューカードを試作し、それに基づき、中学校6校において実践授業を行った。

・キュー・カード実践の概要

キュー・カードの使用により、どれだけ中学生のライティングの際のアイデアが facilitate されるかを実証するために、キュー・カードを作成し、それを千葉県、及び東京都の合計6つの中学校において実践してもらった。

内容

”What is your dream in the future?”という中学校でよく課せられる作文およびプレゼンのテーマを使用することとした。

手順

こちらから「問いかけプリント」と称したキュー・カードを用意し、これらにより、中学生のライティングがどのように促進されるかを見た。教育的配慮から、ただ単にキュー・カードを提示するだけでなく、言語面での補強も同時に行えるよう worksheet を工夫した。また、関連語彙を提示するなどして、辞書使用がなくても書き続けられるよう配慮した。

将来なつてみたい職業はありますか？

その職業について書いてみよう。どんなことをしていますか？

A famous soccer player plays in a World Cup.
He earns a lot of money.

キュー・カード2

その職業に関して、あこがれの人物をあげてみよう！

I want to be like Keisuke Honda.

彼（彼女）はどんなところがすごいですか？
あなたは、どんなところにあこがれていますか？

He belongs to CSKA in Russia.
CSKA モスクワのサッカーチーム
He has a strong will.

キュー・カード3

どうしてその職業についてみたいのか、理由を考えてみよう。

I like to practice soccer.
Playing soccer is very exciting for me.

将来の夢のために、これからすること、頑張ることなどはありますか？

I have to practice soccer hard.
I'll try to study foreign language.
foreign 外国の language 言葉

もう一度書いてみましょう！

What is your dream in the future?

4. 研究成果

中学生の作文データ分析の成果

今回の調査において得られたデータに基づいて(1)中学生は自らの考えを英語でどの程度書くことができるのか、(2)中学生は英語を学習することと英語で書くことに対してどのように感じているのか、(3)中学生は英語で書く時にどのような点に難しさを感じているのかという3つのリサーチ・クエスチョンについて考察していきたい。

まず、中学生の英語のライティング能力について考えていく。今回の調査におけるライティング・データを見ていくと、生徒の学年が上が

るにつれてライティングの出来も質・量共に向上していく傾向にあるということが明らかとなった。総語数の平均に着目すると、3年生が最も多く書けていた。また、英文の複雑さを示す1つの指標となる前置詞の使用においても、3年生が最も豊かな語彙で書けているというデータが得られた。こうしたことから、生徒のライティング能力と英語の語彙数・文法の習熟度には深い関係があるということができよう。そして、もう1つの注目すべき傾向として多くの生徒が自分の考えていることを何とかして伝えたいという思いを持っているということが挙げられる。本研究において、こうした傾向は英文を書くことが好きと答えた生徒はもちろんのこと英文を書くことが好きでないと答えた生徒にも見られた。中には日本語やローマ字の使用が目立つライティングも見られたが、無回答であった生徒はほとんどおらず、ほとんどの生徒が知っている英語といくつかの日本語を駆使して自分の伝えたいことを一生懸命表現しようとしていた。英語教員にとって、生徒のこうした気持ちを尊重し、伸ばしていくことは非常に重要なことであろう。

続いて、英語を学ぶこと・英文を書くことに対する生徒の意識について論じていきたい。アンケートの結果から、2年生は他の学年と比較して英語に対して否定的な感覚を抱く傾向にあるということが明らかとなった。こうした背景には、2年生になって文法事項や単語が複雑になり始め、英語の授業についていけなくなる生徒が増え始めるということが考えられる。言い換えれば、中学2年生というのは英語教育において非常に重要な時期であるということもできるだろう。また、英文を書くことについて着目すると、多くの生徒がその難しさゆえに英文を書くことが好きではないと回答した。具体的な数値で見ると、およそ6割の生徒が「英語が好き」と回答しているのに対し、6割以上の生徒が「英文を書くことは好きではない」と回答している。この事実はライティング指導の在り方を見直し、改善していく必要があることを示している。一方、ライティング指導を改善していく上で優位に働くであろうデータも得られた。その1つがEメールやSNSの利用である。本研究においては、6割以上の生徒が週に1回以上それらを利用しているというデータが得られた。インターネットが発達した現代社会において、EメールやSNSは生徒にとって英文を書いて世界中の人とコミュニケーションをとるための最も身近で最も有効な手段の1つである。

そのため、EメールやSNSをライティング指導の教材として活用していくことはライティング指導を生徒にとってよりわかりやすく、より身近に感じさせるために非常に有効であると言えるだろう。

次に、生徒が英文を書く際にどのような点に難しさを感じているのかという点について考えていく。アンケートの結果を見ると、多くの生徒が単語と文法に対して難しさを感じているということがわかる。英文を書く時にどこに難しさを感じるかを尋ねた質問7の全回答のうち、単語と文法の2つが半数を占めている。さらに、この傾向は生徒の内省記述においても見られた。ある生徒は「ライティングで使いたい単語が普段の英語の授業の中ではあまり使わないものだったから合っているか不安になった」とコメントしている。実際に、現行の教科書で扱っているトピックのほとんどは学校生活に関することや文化的事項のどちらかである。こうした生徒の声はライティングのための語彙指導の工夫をしていく必要があることを示している。

最後に、本研究で得られたデータに基づいて、中学校の英語の授業におけるライティング指導をよりよいものとしていくための教育的示唆をいくつか示していきたい。まず、生徒にライティングの成功体験を多く与えてあげることの重要性についてである。本研究では、多くの生徒がその難しさゆえに英文を書くことにたいしてあまりよい印象を抱いていなかった。その一方で、多くの生徒が同時に自分の考えていることを伝えたいという熱意を持っているということも明らかとなった。そのため、英語教員にとって生徒に自分の考えを英文で表現する機会を多く与えると共に、その時の生徒の努力を丁寧にほめてあげることが重要となるだろう。こうした指導は生徒の英文を書くことに対する抵抗を軽減し、生徒に英文を書くことに対して自信をつけさせ、結果として生徒のライティング能力を向上させることにつながるだろう。そして、英語教員にとってもう1つ大切なことは生徒の語彙力を向上させることである。本研究では、多くの生徒が語彙力に対して困難を抱えていた。このことは語彙指導の充実が必要であることを示している。そのための方策として、本論文ではライティングの前と後でそれぞれ1つずつの指導法を提案したい。ライティングの前の指導としては、書かせるトピックに関する単語や役に立つ表現を生徒に示してあげることが考えられる。生徒の習熟度によっては実際に例文を示してあげることも有効であろう。こうした指導

は生徒が自信を持って書くことを助けるだけでなく、書くことを通してその表現を定着させる上でも非常に意義のあるものであろう。そして、ライティング後の指導として教員から生徒に対してフィードバックを与えてあげることも重要である。このことに関連して、本研究で行った内省記述は生徒が何を書きたかったのか、どのようなことを感じていたかを把握するために非常に有効であった。こうした生徒からの声を上手く活用しながら一人一人に対して丁寧なフィードバックを与えてあげることが求められるだろう。

キュー・カード実践の成果

・ライティング・データの pre, post 比較
本研究では、キュー・カード指導の前後に行った pre, post のライティング・テストを特に総語数の増減に着目して分析を行った。総語数に関しては、全体(477名)で pre の平均が 36.14 語、post の平均が 40.96 語であった。学年別では、2年生(237名)では pre の平均総語数が 35.52、post の平均総語数が 40.03、3年生(240名)では pre の平均総語数が 36.75、post の平均総語数が 41.79 であり、学年が上がるにつれて、平均総語数は増加しており、増加率においては学年差での大きな差は見られなかった。

また、pre のライティング・タスクでの総語数を、0 語~20 語(グループ A)、21 語~40 語(グループ B)、41 語以上(グループ C)の 3 グループに分け、それぞれキュー・カード指導後の post のライティング・テストがどのように変化したかを分析した。

pre のライティング・テストと比較して、post テストで総語数が 5 語以上増加した生徒は、グループ A では 164 名中 73 名、グループ B では 127 名中 66 名、グループ C では 186 名中 90 名であった。3 グループとも、約半数の生徒が 5 語以上の増加があった。

さらに、pre のライティング・テストと比較して、post テストの総語数が 20 語以上増加した生徒は、グループ A では 15 名、グループ B では 31 名、グループ C では 32 名であった。

以上のことから、どのグループにおいても、キュー・カード指導において一定の効果は得られたといえるが、特に、グループ B の生徒に対して大きな効果があったといえる。

グループ B の生徒たちの内省記述の中には「もっと例がほしかった」「単語が分からなかった」という記述がみられ、キュー・カード中に、ドリル的な練習問題や単語のヒントを増やすと、

生徒のライティングの助けになることが分かった。また、グループの生徒については、pre テストの段階で 40 語以上書くことができる力を持っていたので、指導の際に、キュー・カードの内容に加え、さらに接続詞や文章の構成の仕方など、プラスアルファの指導ができるような内容を示すと、さらに効果が上がると思われる。

・生徒の内省記述の分析

生徒に、post テスト後に「2 回目のライティングをしてみて自由に記述してください」という質問に答えてもらった。その結果、キュー・カード指導を実施したことにより、「1 回目より 2 回目のライティングのほうを書きやすかった」という記述が多く見られた。キュー・カードで自問自答することが、ライティングにおいてアイデアを生み出したり深めたりするのに効果的だという事が言える。

一方で、特に pre テストでの総語数が少なかったグループの生徒たちの記述には、単語や文法でつまづき、書きたいことが書けなかった、という記述が多く目立った。前述したとおり、キュー・カードでアイデアを深める手助けをすると同時に、単語や文法の反復練習などを行い、書くことへの自信につなげていけるような指導が必要であることが分かった。

以下は生徒の内省記述の一例である。(原文まま)

【グループ】

- ・単語が分からないときはつらかった。
- ・書きたいことは決まっているのに、英語にすることができないところがあった。単語と文法をもっと練習しないとイケない。
- ・やはり英語で文を書くときは、いろいろな単語や文法を知っている必要があるので大変だった。2 回目は、前回のプリントで「理由」をやったのを思い出せたので、前よりも書きやすくなった。

【グループ】

- ・1 回目よりも文章の構成の仕方が少しだけわかったから前回よりもたくさん書けた。けど、練習した内容が思い出せなかったのがやしい。
- ・何から書けばいいかわからない。同じような単語を何回も書いてしまうから、どの文も同じような文になってしまう。どうしたらいいか？
- ・1 回目の時よりも 2 回目のほうが文章の内容が濃く書けるようになりました。今までは、

なりた職業とその理由しか書けなかったけれど、その職業について書いたり、あこがれの人物のことを書いたりできてよかったです。

【グループ】

- ・and でつないでいいのかな？とか、こんな単語で通じるのかな？と思った。1 回目よりもスラスラ書けた。文をできるだけ膨らませようといういろいろ考えた。2 回目は楽しかった。
- ・1 回目の時よりも、書きたいことが次々に頭の中に浮かんできました。今まで習った文法を使ったことで、文章がまとまっていると思います。It ~ for ... to の文は使えるなと思いました。前回よりも楽しく感じられました。単語力をもう少し上げたいです。
- ・自分がなりたいものだけではなく、誰のようになりたいか、どうすればいいか、など詳しく書けるようになった気がする。接続詞とかをもっと知ればもっと上手に書ける。

以上は生徒の内省記述の一例だが、全体的にグループでは単語や文法がわからないことへの不安や自信のなさが見られた記述が多く見られた。一方で、グループでは、キュー・カードで指導した基本的な内容に加え、さらにライティング全体の構成や接続詞について学びたいという意欲的な記述が見られた。このことから、学習者の習熟度に応じて、キュー・カードの内容もレベル別のものを用意する必要があることが分かった。

・指導者からの意見

実際に生徒たちにキュー・カードの指導をしていただいた先生方より、指導後にキュー・カード指導をしてみたの感想をお聞きした。

- ・成績上位の生徒にとっては効果があったと感じた。実際に 2 回目のほうが充実した内容になっていた。しかし、平均点から下の生徒にとっては難しい作業だと感じた。ライティングの際に例がないと書けない、という子も多くいた。ドリル形式で何度も練習したり、モデル文を最初に真似して書かせたりすると効果的だと思う。
- ・キュー・カードで指導した内容が post テストに反映され、伸びていると感じる生徒が多かった。反面、このカードでは「内容」のみの指導で、接続詞や文の構成については触れていないので、because を単文で使わないことや、理由を述べる際に first, second などと書くことができることを合わせて指導できれば

さらに良いかと思う。

本研究では、キュー・カード(問いかけプリント)を使用しながら、生徒が自問自答することにより、ライティングの際の思考を促進させようという試みである。その結果、生徒の学年や pre テストでの語数に関わらず、語数の増加を見ることができた。また、キュー・カードで自問自答した内容が post テストに反映している生徒がいることから、ライティングの内容を充実させるのに効果があったといえる。

言語面での補強もできるよう、プリントの中に単語リストや練習問題を取り入れたが、生徒の内省記述や指導した先生方の感想にもある通り、さらに丁寧な言語面での手助けが必要であることが分かった。この点についてキュー・カードの改良の必要があり、今後の課題とする。

【著しい向上が見られたライティングの例()は総語数 原文まま】

Pre
I want to be a doctor because I would like to help sick people. So I study very hard every day. (21)
↓
Post
My dream is to be a doctor. My father is a good doctor. He always takes care of sick people at the hospital. So I want to be a good doctor like him. But It is hard for me to be a doctor. So I have to study very hard every day. (52)

Pre
In the future, I want to be a nursery school teacher. I like to play with the children. I think that child is very cute!! (25)
↓
Post
I want to be a nursery school teacher. Nursery school teacher reads book, sings song, and plays with the children. I like child. Also I like to play with children. I think that Nursery school teacher is very exciting. But I can't play the piano and I don't like to sing song. I will try play the piano. (58)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Habakari, S. & Oi, K. Reexamining the Role of Corrective Feedback on Students' Writing in the EFL Context. *KATE Journal*, 査読有、Vol.27、2013、pp.15-27

大井恭子、ベヴァリー・ホーン「英語の発想でライティング(隔週掲載)」『Asahi weekly』 査読無、2012

〔学会発表〕(計4件)

大井恭子(2014)。「日本の中学高校生の書く力はこの10年間でどのように変化したか」2014.3.1 日英英語教育学会 東京理科大学

大井恭子・生田祐二(2013)。「「AのB」を日本人学習者および英語母語話者はそれぞれどのように表すか 英作文における前置詞使用の一考察」2013.8.17 関東甲信越英語教育学会 松本歯科大学

田畑光義・大井恭子(2013)。「内省記述から見る中学生ライティングのつまずきと課題 千葉県内の中学生を対象にした実態調査から」2013.8.17 関東甲信越英語教育学会 松本歯科大学

大井恭子(2012)。「英文法指導にはライティングが欠かせない」2012.12.23 第27回関東英語教育学会セミナー 同志社大学

〔図書〕(計2件)

大井恭子(編著)『ライティングの際の思考を促進させる「キュー・カード」の開発』平成25年度文部科学省科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究成果報告書、2014、110

大井恭子(編著)『発信力をつけるライティング いまここから Here and Now』平成24年度文部科学省科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究成果報告書、2013、100

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

大井 恭子(Oi, Kyoko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：70176816